

《研究論文》

グローバル時代における海外での日本文学の教え方

ー総合的日本語教育の実践に向けた一案ー

ドラージ・土屋 浩 美*

北米はいま「日本語ブーム」の真っ只中にある。日本語学習者数が年々膨れ上がり、2003年の国際交流基金の調査によると、北米の日本語学習者は初等教育から大学教育を含め、14万人に達した¹。ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) の基準では、以前は日本語は「あまり教えられていない言語」というカテゴリーであったが、いまは「よく教えられている言語」に格上げされている。また日本語を外国語教育としてカリキュラムに入れる高校も多くなった。最近の日本語熱を示すかのように、2006年度には高等教育において、日本語・日本文化の科目でのAP (Advanced Placement) システムが導入された。APシステムとは、大学のIntermediateレベルの学力をつけることを目的とし、テストにパスすることにより、その言語能力が承認される。APの導入により、これから益々大学において、日本語受講者が増えるだけでなく、大学に入学する時点で語学レベルの高い学生の割合が多くなっていくことも意味しており、大学側の受け入れ態勢を早急に見直す必要が迫っている²。

「日本語ブーム」は、バブル経済期の80年代にも見られた。ビジネスや雇用のため日本語を学習する、いわば実学志向のものが多かった。しかし、現在の学習者層は多様化している。もちろん専門の為に日本語を学習する者も多くいるが、大多数が日本のアニメや漫画に代表されるサブカルチャーへの純粋な興味から日本語を学習している

ようだ。日本の大衆文化の影響力はもはや無視できないであろう。二十一世紀に入り、新しい学習者層の増加により、今までの指導方法を問い直す必要が出てきた。

日本語教育における異文化理解の重要性はしばしば議題にあがるが、文化の形が流動的な今、従来の日本の文化教育の見直し、そして新世代学習者に向けた指導においての新しさの導入といった点も考慮する必要がある。本論では、日本文学に注目してみたい。文学作品をどのように文化教育に活用できるかを考察し、総合的日本語教育の一環としての文学教育の意味を検討してみたい。

1. 異文化理解とは何か

近年「異文化理解」という言葉がしばしば議論されるようになった。言語は単なる道具でなく文化を映し出すものと見なされ、完成された言語教育とは文化も含め総体的に教授されるものだという見方である。角田 (2001: 9) は「日本語を勉強していても、どういう場面でどのように用いるかがわからなければ役に立たない、あるいは日本語は日本文化の一部または文化を反映しているものだから、日本語を学ぶためには学習者は日本の文化を理解しなければならない」と主張する。金本 (1988: 14) も「日本文化の理解の裏付けなしに学習された日本語はコミュニケーションの中で機能することができない」と述べる。ACTFL が出版した「21世紀における言語能力基準」(Standards for Japanese Language Learning in the 21st

*ヴァッサー大学 中国語日本語学科 助教授

Century) (1999)においても、文化理解は日本語学習における重要な柱の一つとして定められている。

しかし、「文化」とは曖昧な言葉である。文化とはどのような基準によって定義されるのだろうか。海外で日本文化を紹介するとき、茶道、華道、能楽、琴といった伝統文化でくくられることが多い。言い換えれば、いかに日本が特殊な異文化であるか、西洋文化と異なるかを強調することが文化教育と見なされがちである。しかし、タイ (Tai 2003) も論じているように、このような異文化教育だと、教師自らが日本を西洋に対する文化的他者 (Oriental Other) と位置づけることになり、そこに西洋という主体をもつてのみ異文化としての日本文化が成立するというパラドキシカルな構図が作り上げられかねない。

21世紀に求められる新しい異文化教育は、一方的に伝統的な「異文化」を教えるものでなく、教師と学生との間での相互理解を念頭に置いた形が望ましい。セイコ・カタオカも「日本語教師は日本文化の伝道士になる必要はない。学生と共に思考し、ガイドラインを与えればいい」と考察している³。さらに森山(2007:111)は、日本語教師には「異文化を読み解く能力 (文化リテラシー) や姿勢を教えることも求められている」と主張する。

しかし、「異文化を読み解く能力」の開発は、語学の授業と併用してではなかなか困難である。分析能力に重点を置くような独立した授業がなくてはならない。そこで、文学の授業が大きい役割を果たす。

2. 文学教育の現状

もともと北米において、日本語教育と日本文学教育はワンセットで教えられてきた。文学は文化のバックボーンとして捉えられ、日本的習慣や言語の詩的表現や言い回しも文学作品から学ぶものだとなされてきた。しかし、最近、言語と文学の分離が起こっている。その原因として、学生の

文学離れと、文学の授業が一般に英語でなされるということから語学教育のなかでの文学の立場が曖昧になってきていることが挙げられる。

英訳での文学はどの学科が教えるべきなのかといった議論は、70年代あたりからヨーロッパ言語の分野でもしばしば交わされてきた。外国語学科は語学に徹するべきであり、文学もその国の言語で読まれるべきだという主張もあった (Chisholm 1975)⁴。もちろん原文で文学作品の分析を行い、外国語で意見交換できるような能力を開発することが理想であるが、週5時間の授業時間数で、授業以外日本語を使うこともない環境のなかではそこまでのレベルに到達させるのは困難なのが現状である。

また、最近のカルチュラルスタディーズの流行などで、文学は学際的対象として比較文学プログラムや女性学プログラムなどに取りこまれ、ますます日本語教育における文学教育の意味が希薄になってきた。そして、語学と文化が社会科学と人間科学とに分断される傾向も見られる。しかし、グローバル時代だからこそ言語教育にも学際的視点が必要であり、文学教育の可能性を問い直すことができるのではないだろうか⁵。

3. 文化教育の一環としての文学の指導方法

ここで実際にどのような形で文化教育の一環として文学作品を利用できるか、そして、文学教育に新しさを取り入れていけるか考えてみたい。まず、グローバル時代において提案したい点は、1) 文化的テーマを持った構成にする、2) 学際的アプローチで授業を進める、といった点である。

リベラルアーツカレッジでは文学を受講する学生の専攻分野は様々である。文学という枠にとらわれず、むしろ積極的に映画などのメディアを導入し、学生の多様なバックグラウンドを生かし、インターディシプリナリーに学生間のダイアログを促すことを提案したい。

題材としてポピュラーカルチャーは効果的である。ポピュラー文化は現代日本を代表する要素の一つであり、アメリカの若年層にも深く浸透している。国家という概念が人工的なもので、コミュニティは文化（プリントメディアなど）の共有により構築されるというベネディクト・アンダーソン（Anderson 1983）の論に従えば、漫画やアニメは、グローバルレベルでの「想像の共同体」の構築に貢献していると言えよう。日本のポピュラーカルチャーは、今や伝統文化と並んで日本を代表し、また興味深いことに、それは西洋との文化の混合といったハイブリッドな要素を含んでいる。日本のポピュラーカルチャーはもっともグローバル時代にふさわしいトピックだといえる。また、アニメ、漫画、大衆文学作品などは比較的易しい言葉が用いられているため、これらを取り入れることで語学教育と結びつけることも可能である。

一昔前はポピュラーカルチャーはアカデミアにはそぐわない、低級なものとして捉えられてきたが、最近ではカルチュラルスタディーズなどの影響で、そのような偏見はなくなってきた。また、ポピュラーカルチャーの恩恵で日本語学習者が維持できているという現実も見据えなければならぬ。その意味でも文学教育そして語学教育においても、ポピュラーカルチャーの視点は積極的に導入されるべきであり、教え方にも改革が必要だと思われる。

ヴァッサー大学の場合、一学期は13週ある。通常文学の授業は週二回で、一回の授業が75分となっている。筆者は、30分を作品の文化や時代背景などの講義に費やし、30分をディスカッションに、そして15分を作品のまとめ、または学生のプレゼンテーションや発表に当てている。しかし、文学の授業の場合、特に決められた授業構成のモデルはなく、教師によって指導の仕方は様々である⁶。

ブラックボード（Blackboard）といったシステ

ムも有効活用できる。ブラックボードは、教育機関で広く活用されているもので、このサイト上でコースのページを作り、シラバスやクラスアナウンスを掲載することができる。またテキストを載せることも出来、クラスに登録している学生は教材を自由にダウンロードすることが可能である。ハードカバーで、しかも入手困難な作品を必要なページだけを課題として出せることはありがたい限りである。また、ブラックボードの他の活用例として、学生のレポートなどもここで発表させ、ディスカッションボードという機能を使い、学生同士が意見交換できるようにすることも可能である。このように授業時間外でも、インターネット上で、コミュニケーションを図ることができる。

採点基準として、クラスでのディスカッションの参加を20%、中間試験（または5－6枚程度のレポート）を25%、期末のレポート（10-12枚程度）を35%、レポート発表（またはディスカッションの進行）を20%、という形を筆者は取っている。

4. 新しい女性文学のコース案

このように、日本文学の授業では情報を一方的に提供するというよりも、学生のコミュニケーション能力や日本文化の分析能力を養うことが主となる。ここで実際どのように現代女性文化をテーマに文学の授業を構成することが出来るか示してみたい。

北米において日本女性文学が注目されはじめたのは、1980年に入ってからで、それはフェミニズム運動と連動している。翻訳も80年代に集中して出版された。オーバー（Orbaugh 2001）の統計によると、有吉佐和子、林芙美子、平林たい子が当時は頻繁に訳された作家であった。女性文学作品のアンソロジーも80年代から90年前半にかけて何冊か出版されている⁷。河野多恵子、津島祐子、高橋たか子、大庭みな子、金井美恵子といった作家も授業や研究で頻繁に取り上げられている。

最近、文学賞受賞者のリストをみても分かるように、若手作家の活躍がめざましい。にもかかわらず、授業で扱われるものは80年代までに発表されたものが中心でそれ以降進展が見られない。若手作家の作品は出版から年月が浅いこともありなかなか授業では取り上げられない。しかし、90年以降の作品には現代の日本社会が如実に反映されているということから、女性学、社会学、メディア学などからのマルチディシプリナリーな読みが可能で、学生の興味も引くことができるのではないだろうか。

80年以前の女性文学作品で論じられた点は主に、妻や母としての経験であり、成熟した大人の女を扱ったものが多かった。しかし、90年以降に登場した女性作家の作品には、若い独身女性が扱われたものが多い。そして、読者もそのような層である。新しい文学作品に共通することは、家父長的な家制度に縛られることなく、自由に新しい家族の形態をつくりあげようとするところであろう。斉藤美奈子(2002a)は、林真理子、江国香織、吉本ばなな、山田詠美、柳美里などの現代女性作家を広範に取り上げ、彼女たち作品に見られるジュニア小説や少女漫画などの影響を指摘している。90年以降の作品は現代日本文化、特に女性文化を考えるうえで適切で、また大衆文化という視点で論じることも出来る。ハイカルチャー・ローカルチャーといった二項対立はいまや消去しつつある。文学を色々なメディアとの照らし合わせの中で読むと議論に広がりを持たせることが出来る⁸。

そもそも1990年頃は、純文学と大衆文学の境界が崩壊した時期といってもいいだろう。村上春樹の『ノルウェーの森』が1987年に文学賞を受賞し、吉本ばななが1988年『キッチン』で登場して以来、大衆文学への門戸は北米でも開かれた感がある。『キッチン』は必読書として文学の授業ではよく取り入れられている。村上春樹においては、日本語を専門としない英語専攻の学生までもが卒業論

文に選ぶほどの人気となっている。

そのような中、近年、大衆をターゲットにした翻訳プロジェクトや出版物が出てきている。2002年に文化庁により発足された現代日本文学の翻訳・普及事業(Japanese Literature Publishing Project)では、明治以降の84作品が翻訳対象に選ばれ、そのうちの多くが大衆文学作品となっている。女性の作品では山田詠美『ベッドタイムアイズ』、『指の戯れ』、『ジェシーの背骨』、横森理香の『ぼぎちゃん』、江国香織の『神様のボート』、川上弘美の『真鶴』、柳美里『ゴールドラッシュ』、増田みず子『シングル・セル』、松浦理英子『親指Pの修行時代』、水村美苗『本格小説』、角田光代『対岸の彼女』、多和田葉子『容疑者の夜行列車』、宮部みゆき『火車』などが選ばれている⁹。

コーブランド(Copeland 2006)が編集した*Women Critiqued*という女性文学作品の批評を集めた著作は、補助教材として最適である。例えば、斉藤美奈子の『文壇アイドル論』、高原英理の『少女領域』、上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子の共著『男流文学論』などからの抜粋も英訳されており、最近の文学批評の傾向を掴むことができる。このように、新しい女性文学を教えるにあたっての教材はすでに十分に出揃っているのである¹⁰。

コースを“Japanese Popular Culture and Literature : Women's Writings of the New Generation”と名づけ、まずは、7回を見立てたプランを立ててみよう。基本的に英語で授業を行うが、もし日本語レベルの高い学生がいるようであれば、作品のいくつかのパスセージを原文で読ませてよい。

一回目：イントロダクション

シラバスを読みながらコースの主旨を説明する。1990年以降、サブカルチャーの勢いが顕著に見られるようになり、以前はHondaやSonyが代名詞だった日本文化が、いまやアニメや漫画で代表されるようになった。また吉本ばななや村上春樹の

登場で文学という概念への認識が変わっただけでなく、少女文化、おたく文化というものがアカデミアにおいても研究対象として取り上げられるようになった。このコースでは、大衆文学を通して多様な女性の表現を調査し、そして女性文学作品から読み取れる現代の日本文化の深層を、日本の伝統や西洋文化などとの比較的視点から分析する。

二回目：「家」の女（日本女性文学の成り立ち）

女性文学というジャンルの成立と文化的背景を中心に講義し、いかに女性作家たちが父権制度からの解放と女性表現の自由を求めてきたかを論じる。女性文学の歴史を説明するにあたり、*The Woman's Hand* (1996)などの著書が大変参考になる。妻・母の経験、そして父権社会で男性の「他者」としてしか書くことを許されなかった作家たち、言い換えれば「家の女たち」の苦悩や内に秘められた欲望は、どのように作品に表されてきたかを論じる。取り上げることの出来る作品はたくさんあるが、「家」という概念をテーマに絞れば、例えば、妾を持つ夫に従い家の為に全てを犠牲にする女の一生を描いた円地文子の『女坂』。または山姥というアイデンティティを隠しながら、普通の家庭の主婦として生きる女の悲しさをファンタジー調で描いた大庭みな子の「山姥の微笑」などがある。

三回目：オンナの時代（バブル期の作家とコマーシャルイズム）

80年後半から90年前半のバブル期を代表する作家を取り上げる。現代社会とは消費社会である。文学も売り上げ中心主義になった。短歌の世界では俵万智が『サラダ記念日』で革新を起した。彼女の成功は出版社のコマーシャル戦略なくしてはありえなかっただろう¹¹。俵は口語体やカタカナを用い、「アメリカ的なライト感覚」を短歌に取り入れた。しかし、それだけでなく、恋愛における日本的な感覚も持ち合わせており、『サラダ記

念日』は「多国籍混血文化社会である80年代後半」（斉藤 2002b: 47）を代表する作品となった。

また、この時期、結婚しない女性や仕事に生きる女性がメディアで取り上げられるようになった。林真理子は代表的な作家として挙げられる。彼女は母でも妻でもない女性たち、所謂「新しいオンナたち」¹²を描いた。結婚しないオンナたちの恋愛観や欲望を論じ、そしてそれに付随する葛藤はいかなるものか考えたい。

語学教育の観点から述べれば、『サラダ記念日』は語学のテキストとしても最適である。短歌といえども口語体なので読みやすく、またそれだけではなく、詩的表現、状況分析、人物分析などのアプローチから日本語でのディスカッションにも発展させることができるだろう。

四回目：少女ナラティブ1（少女漫画における女性の表現）

ここでは少女漫画に注目してみたい。少女漫画はその芸術性が最近見直されているだけでなく、文学にも影響を与えていると考えられている。90年以降に登場した女性作家たちは漫画世代である。漫画的世界を継承する作家たちも多い。

ここでは、少女ナラティブ（語り）の原点である少女漫画を取り上げ、特に「母と娘の関係」に焦点を当てたい。少女にとって母親は、しばしば脅威的な存在としてみなされる。なぜなら母親は社会の求める彼女たちの将来の姿であり、少女にとって、母親は同一視することができない「他者」だからである。中沢けい、山本文緒などの女性作家は母と娘の確執を現実的に描いている。菅 (2004: 161)は「異世代の女性である〈母〉」は乗り越えるもので、そこから「娘たちは自己を発見する」と論じる。漫画のなかで少女たちはいかなる手段で母を乗り越えるか見てみよう。

少女漫画家たちは、特に産む性への嫌悪感を描いてきた。例えば山岸涼子などは母親をフォークロリックなモチーフで描き、般若やきつねなどに

ばける母を登場させ、深層心理に訴えるグレートマザーにも近い恐怖を表現してきた。漫画の興味深い点は、そのような嫌悪や恐怖をすり替え、空想世界の枠組みの中で形成しなおすことである。大島弓子の「七月七日に」¹³という作品では形は違うが、母親の倒錯が描かれる。育ててくれた母親が実はまったく血の繋がらない人間で、しかも青年であったという話なのだが、この作品は、主人公の孤児性やゲイやトランスジェンダーに母性を求める点において、吉本ばななや江國香織の文学作品との共通点が見られる。少女性を抱える作家たちは、忌嫌う母を自己世界から排除し、自分たちに好都合な理想の母親像を作品の中で作り上げる。彼女たちの原動力は、社会から逃避できる場所として構築されてきた少女文化—少女のための非現実な領域—にあるのではないだろうか。

評価の高い漫画家、例えば、大島弓子、山岸涼子、萩尾望都、竹宮恵子等の作品は英訳がないのが残念である。しかし、語学教育と結びつけられ、ある意味、理想的な総合的日本語教育のモデルとなる。例えば、ヴァッサーでは卒業プロジェクトなどで漫画を訳したいという学生に文学の授業でも使えそうなものを訳してもらっている。語学教育と文学教育は工夫次第で効率的に連結させることができるのである。

五回目：少女ナラティブ2（女性作家と少女性）

ここでは漫画に代表される少女文化の中で育った作家たちの作品に注目する。吉本ばななの『キッチン』は、現代文学を語るに於いてのターニングポイントになったと言っても過言ではない。『キッチン』の、コバルト文庫や漫画にみられるような口語的文体が新しいとして評価された。80年後半から90年にかけてデビューした女性作家の共通点は、「少女っぽい」要素だろう。「少女っぽい」とは「少女漫画っぽい」とも言い換えることができる。さらに裏を返せば、それは「成熟した大人の女性が持つ価値観とのズレ」とも言い表

すことができるだろう。

ここでは吉本ばななの『キッチン』や江國香織の『きらきらひかる』をとりあげる。一昔前は、女性は結婚という通過儀礼をへて一人前の「女」とみなされ、結婚後は結婚前とは違うアイデンティティーや社会的役割が義務付けられていた。つまりボーボワールの言う「第二の性」を担う運命にあった。しかし、ここで扱う女性主人公たちは、女として生まれ代わることなく、少女期から地続きの自己に拘る。彼女たちは「少女性」を武器に、家の束縛を逃れ、新しい家族（ホーム）の形（Treat 1993）すらも提示している。例えば、『キッチン』ではトランスジェンダーの母、その息子、そして主人公の孤児の少女が作り上げるホームが描かれる。「家」は社会制度の延長で、女にとって忍耐の場所であった。しかしここでの「ホーム」は、少女たちの居場所、安らぎの場であり、そこでは血の繋がりがや法的な繋がりがすらも無化される。

六回目：女性文学とミステリー

桐野夏生や宮部みゆきのミステリーは、最近頻繁に英訳されているようだ。彼女たちの作品は都市社会を忠実に映し出している。宮部の『火車』はカード社会の危うさを、桐野の『Out』は普通の主婦たちの犯しうる犯罪を淡々と描く。シーマン（Seaman 2004）によると、ミステリーは以前は男性のジャンルであった。作中で女性は常に被害者であり、窃視のターゲットとして欠かさない存在であった。女性ミステリー作家はミステリーの窃視という要素を逆にとり、女性から見た社会、被害者としての視点から見た社会をみごとに描き出す。女性ミステリーの画期性、そして女性作家たちの着眼する主婦やOLなどの女性文化や都市社会はどのようなものかを論じる。

七回目：まとめ

最後に「異文化理解」という点を念頭に、比較

的視点からあらためて日本の女性文化を再考する。女性の作品を通して日本の現代社会や文化を見てきた。現代文化は常に伝統と新しさのせめぎ合いのなかで形成される。大衆文学を通して見てきた日本文化は、確かに「異文化」である。しかし、決して西洋の“Oriental Other”（価値観の全く異なる文化的他者）ではない。違いはありながらも、共感できる点も多いからである。現代日本文化と西洋文化との比較を通して浮上する「文化的差異」は何なのかを作品を振り返りながら議論する。

5. 結び

新しいグローバル時代のなかでの日本語教育は、語学と文化の総合的アプローチで教授されるべきである。日本文化という「異文化」は、けっしてオリエンタルなファンタジーの対象でなく、西洋文化と経済的・文化的に密着したものとして把握しなければならない。異文化学習で重要な点は「文化」を分析し、読み解く眼を養うことである。

外山（2001：172）は、日本文化を担うものを「インサイダー」と呼び、文化を外から学ぶものを「アウトサイダー」とし、両者間には見解において決定的な差異があることを指摘している。文化教育にしろ文学教育にしろ、インサイダーの見解は絶対視される傾向にある。しかし、外山は「アウトサイダーはインサイダーとの解釈、評価を異にすることをはばかってはならない。真摯な研究の成果であれば、インサイダーの反発、批判をおそれることなく、これを発表する必要がある。インサイダーは、狭量な排他主義にまどわされて、アウトサイダーの異説を排除するようなことがあってはならない……インサイダーはアウトサイダーの異本的解釈を迎え、これと競い合うという友好的対立関係になることを喜ぶ雅量をもつのが、国際学問のあるべき姿である」と述べている。

日本文学の授業では、教師が一つの読みの解釈を与えるのではなく、教師と生徒、生徒同士の見解のやりとりや議論を通じ、相互に文化を学び取っていくことが大切である。また、最終的にこういったコミュニケーションを通じ、言語能力をも高めることができれば、それは最も理想的でかつ新しい外国語教育のありかただといえよう。その意味でも、文学と語学の連結は大切である。日本語で文学作品を学生に読ませ、さらに日本語を使わせながらいかに文学の深い読みを可能にさせるかといった問題は、私自身の課題でもある。これからの日本語教育においては「総合性」（森山 2007：11）が期待される。グローバル時代の現代、日本語教師はどのような新しい役割を果たすことができるか、今後検討すべき課題は大きい。

〈注〉

- 1 2003年、国際交流基金の調べ。（「2003年海外日本語教育機関調査結果」http://www.jpff.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2005/usa.html）
- 2 日本語教育の現状とその変化として、筆者が勤めるニューヨーク州にあるヴァッサー大学（Vassar College）の例を挙げたい。ヴァッサーは学生数2,700人ほどのリベラルアーツカレッジである。以前は日本語プログラムは、アジア研究プログラムの傘下にあり、日本語の専攻はオファーしていなかった。しかし、日本語学習者の増加により、2004年にDepartment of Chinese and Japaneseとして学科が設立された。現在日本語を専攻する学生のほとんどがメディアスタディーズ、コンピューター、フィルムなどと専攻を掛け持っている。
- 3 Tai（2003：22）における引用。
- 4 金本（1988：15）は、「日本文化は日本語を通して理解され初めて日本文化の文脈の中で機能することが可能」と考える。しかし、深い文化理解、分析能力の開発を目指した場合、日本語のみで行うことには限界があるように感じられる。
- 5 Claire and Olivier Kramsch（2000）は、語学教育のなかで文学がどのような役割をはたし、位置づけられてきたかを綿密に歴史的観点から説明している。最終的に21世紀において、文学と語学は併合して教授されるべきだと結論付けている。
- 6 Showalterの*Teaching Literature*（2003）は、文学の指導法や授業の進め方など、役に立つメソッドを事

細かに説明している。

- 7 *Japanese Women Writers* (1991), *This Kind of Woman: Ten Stories by Japanese Women Writers, 1960-1976* (1982), *Rabbits, Crabs, etc. Stories by Japanese Women* (1982) 等が頻繁に教材として使用されている。
- 8 最近の女性作家の作品は比較的読みやすい文章で書かれている。そのため、語学の教材としても利用できる。
- 9 日本文学出版交流センター『現代日本文学の翻訳・普及事業』(<http://www.j-lit.or.jp/j/programs/translation.html>)。また、2006年に講談社インターナショナルから出版されたアンソロジー、*Inside and Other Short Fiction*には、2000年以降に発表された女性文学作品が収められている。文学賞の受賞経歴を問わず、いかに文化を反映し、なおかつ新しい女性性を問いただしているかが焦点となっている。
- 10 アニメ研究ではSusan Napier の*Anime from Akira to Howl's Moving Castle*が参考になる。
- 11 武内佳代、ヴェッサー大学での『サラダ記念日』に関する発表より (2006年11月2日)。
- 12 斉藤美奈子 (2002b) 「林真理子、シンデレラガールの憂鬱」『文壇アイドル論』参照。
- 13 初出『別冊少女コミック』1976年7月。

〈参考文献〉

- Anderson, Benedict (1983) *Imagined Communities*, New York: Verso.
- Birnbaum, Phillis, trans. (1982) *Rabbits, Crabs, Etc.: Stories by Japanese Women*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Chisholm, David H. (1975) "Teaching Foreign Literature in English Translation: A Reply," *Teaching German* 8, no.1: 98-101.
- Copeland, Rebecca L., ed., (2006) *Woman Critiqued: Translated Essays on Japanese Women's Writing*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ekuni Kaori (2003) *Twinkle Twinkle*, trans. Emi Shimokawa, New York: Vertical.
- Enchi Fumiko (1994) *The Waiting Years*, trans. John Bester, New York: Kodansha America.
- Hayashi Mariko (1991) "Wine" *New Japanese Voices*, ed. Helan Mitsios, New York: The Atlantic Monthly Press, 138-52.
- Hayashi Mariko (2000) "One Year Later" *Tokyo Fragments*, ed. and Trans. Giles Murray, New York: IBC publishing, 91-120.
- 角田三枝 (2001) 『日本語クラスの異文化理解—日本語教育の新たな視点』、くろしお出版。
- 金本節子 (1988) 「日本語教育における日本文化の教授」『日本語教育』65号、1-15。
- Kramsch, Claire and Oliver Kramsch (2000) "The Avatars of Literature in Language Study," *The Modern Language Journal* 84. 4.: 553-73.
- 菅聡子 (2004) 「〈わたし〉のなかの〈母/娘〉：森瑤子『嫉妬』『夜ごとの揺り籠、舟、あるいは戦場』をめぐって」『国文学解釈と鑑賞別冊 女性作家 (現在)』至文堂、161-171。
- Kirino Natsuo (2003) *Out*, trans. Stephen Snyder, New York: Kodansha International.
- Layne, Cathy ed., (2006) *Inside and Other Short Fiction: Japanese Women by Japanese Women*, New York: Kodansha International.
- Lippit, Noriko Mizuta and Kyoko Iriye Selden, eds. (1991) *Japanese Women Writers: Twentieth Century Short Fiction*, New York: M.E. Sharpe.
- 三浦昭 (1986) 「アメリカにおける日本語教育の諸問題」『日本語教育』(61)、6-19。
- 森山新 (2007) 「グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語学」『お茶の水女子大学比較日文学研究センター研究年報』(3)、111-7。
- Napier, Susan (2005) *Anime From Akira To Howl's Moving Castle: Experiencing Contemporary Japanese Animation*, New York: Palgrave Macmillan.
- Oba Minako (1991) "The Smile of a Mountain Witch," *Japanese Women Writers: Twentieth Century Short Fiction*, trans. Noriko Mizuta Lippit, Kyoko Iriye Selden, New York: M. E. Sharpe, 194-206.
- Orbaugh, Sharalyn (2001) "The Construction of Gendered Discourse in the modern Study of Japanese Literature," in Janice Brown and Sonja Arntzen, eds., *Across Time and Genre: Reading and Writing Women's Texts*, Alberta: University of Alberta.
- 斉藤美奈子 (2002a) 『L文学完全読本』マガジンハウス。
- 斉藤美奈子 (2002b) 『文壇アイドル論』岩波書店。
- Seaman, Amanda C. (2004) *Bodies of Evidence: Women, Society, and Detective Fiction in 1990s Japan*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Schalow, Paul Gordon and Janet A Walker, eds. (1996) *The Woman's Hand: Gender and Theory in Japanese Women's Writing*, Stanford: Stanford University Press.
- Showalter, Elaine (2003) *Teaching Literature*, Malden, MA: Blackwell.
- Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century* (1999) National Standards in Foreign Language Education Project, 328-60.

- Tai, Erika (2003) "Rethinking Culture, National Culture, and Japanese Culture," *Japanese Language and Literature* 37: 1-26.
- Tanaka, Yukiko and Elizabeth Hanson, eds. (1982) *This Kind of Woman: Ten Stories by Japanese Women Writers, 1960-1976*, Stanford: Stanford University Press.
- Tawara Machi (1990) *Salad Anniversary*, trans. Juliet Winters Carpenter, New York: Kodansha.
- Treat, John Whittier (1993) "Yoshimoto Banana Writes Home: Shōjo Culture and the Nostalgic Subject," *Journal of Japanese Studies* 19, no. 2: 353-387
- 外山滋比古(2001)「外国からの方がよく見える」『お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学シンポジウム報告書』、165-73。
- Yoshimoto Banana (1994) *Kitchen*, trans. Megan Backus, New York: Washington Square Press.